

「研究大学強化促進事業」令和2年度フォローアップコメント

機関名	フォローアップコメント
大阪大学	<ul style="list-style-type: none">○全体が順調に進捗していると判断される。○研究成果の実用化支援などの取組が成果を上げることにより、産学共著論文率が本事業の採択大学中においてトップという結果に繋がっており高く評価される。○一方で、論文数や Top10%論文数の伸びに関する課題については、大学として特徴的な対策すべき要因を大学経営層と共有し、対策を進めていくことを期待したい。

令和元年度フォローアップ結果への対応状況と今後の事業展開について

機関名	大阪大学				
統括責任者	役職	総長	実施責任者	部署名・役職	理事・副学長
	氏名	西尾 章治郎		氏名	尾上 孝雄

令和元年度フォローアップ結果

- 事業全体が順調に進捗していると判断される。今後も成果と取り組みの継続に期待したい。
- 徹底した国際研究拠点の形成への意欲が見られる事業計画であり、グローバルな研究活動の成果が出ていることは高く評価される。
- 世界屈指のイノベティブな大学として、イノベーションに関する世界ランキング 50 位以内に継続して再選されるような成果の創出を期待したい。

将来構想の達成に向けた現状分析

将来構想 1 【世界屈指のイノベティブな大学】

① 令和元年度フォローアップ結果への対応状況

- 令和元年度フォローアップ結果を踏まえ、本事業実施責任者である研究担当理事による検証を適時行い取組に反映した。
 - 特に高く評価いただいている「徹底した国際研究拠点の形成への意欲」については、2019 年度も積極的に取り組み、その結果として、2019 年度中に国際ジョイントラボ*26 拠点が新設され 89 拠点となった。これにより 2022 年度の目標（80 拠点）を達成した。
 - 2019 年 10 月に発表された Reuters' World's Most Innovative Universities 2019 において本学は 35 位（国内 2 位）であり将来構想で設定した指標（世界 50 位以内）を堅持している。
- *：最先端の研究を展開している外国人研究者とそのグループを本学に招へいし、本学の研究者と共同研究を実施するために設置する常設の国際共同研究室。

② 現状の分析と取組への反映状況

【新型コロナウイルスの影響を踏まえて実施した取組】

計画の履行や指標の達成に新型コロナウイルスの影響が大きく出るのは、研究者が海外と往来することにより研究力の強化を図る事業であり、影響を受ける指標は「若手・女性研究者の海外派遣と海外研究者招へいの数」、「事務職員による海外の大学の訪問企画と調査への参加者数」である。2019 年度の事業ではこれらの指標に大きな影響は出しておらず順調に推移している。しかしながら、今後、新型コロナウイルスの影響による渡航制限の状況によっては 2020 年度以降の計画の履行や指標の達成に影響が出る可能性がある。これを踏まえ、新型コロナウイルスの本事業への影響を極力回避するため、2019 年度から現在にかけて、以下の取組を実施している。

1) URA 実施サービスのリモート化（対応する取組：[7][8][12][14][15]）

研究者が面接審査を受審する際に提供している「模擬面接」、FD/SD のセミナー、その他のコンサルティングサービスのリモート化（オンライン実施）を進めている。URA が実施方法、コンテンツの工夫をすることにより従来方法と同様の効果が期待できると共に、研究者の移動時間削減等、研究時間の確保にもつながる効果が出ている。

2) 国際ジョイントラボのリモート化（対応する取組[4]）

日本・海外双方の研究者の往来により研究の国際化を推進する「国際ジョイントラボ」の効果を新型コロナウイルスの影響下においても発揮するために、オンラインでのディスカッション

環境を具備することによる「国際ジョイントラボのリモート化」を推進する。これにより、従来は渡航支援の対象外であった、大学院生が海外研究機関とのディスカッションに参加が可能になる等の効果も期待できる。

3) コロナ禍に関連する 2019 年度以降の研究教育活動の取組について、メールマガジン、特設ホームページでの情報発信（対応する取組：[12]）

- 大阪大学 URA メールマガジン (vol. 67) 「「コロナ対策、それぞれの最前線！」特集」の発刊 (2020 年 4 月)
https://www.ura.osaka-u.ac.jp/uramagazine/vol_067.html
- 大阪大学 URA ホームページ「コロナ禍に関連する研究教育活動の特設ページ」の設置 (2020 年 4 月)
<https://www.ura.osaka-u.ac.jp/researchersupport/2020428.html>

4) コロナ禍を含む「災害時の URA 活動」に関して、2019 年度以降の取組の RA 協議会での情報発信（対応する取組：[12]）

「災害時の URA 活動—大学の活動継続のための URA の役割とは」と題し、大阪大学、国内大学、海外大学の好事例を共有し、参加者間でディスカッションを行った。
<http://www.rman.jp/meetings2020/session.html#b-3>

【新型コロナウイルスの影響に特化しない取組】

「事業終了後までのアウトカム」と「中間的なアウトカム」の指標の 2019 年度実績を以下の 2 つの表に示す。

前述のように、現時点では、計画の履行や指標の達成に新型コロナウイルスの影響は大きくてはいない。現時点ではロジックツリーに示した成果目標に向かい、全ての指標が達成可能な水準で推移している。従って、前項で示した、「新型コロナウイルスの影響を踏まえて実施した取組」を実施しつつ、2018 年度に設定した「目標設定に向けた課題」と「対応する主な取組」を大きく変更することはなく本事業を進める。

「事業終了までの」指標	実績 2019	目標達成に向けた課題 (2019 年度設定からの変更箇所を網掛けで示す)	対応する主な取組
世界最先端研究機構の拠点数	WPI クラス 1 拠点	研究動向と学内人材の分析に基づき研究領域の検討を進め、2021 年度に 1 拠点新設する計画を推進している。さらに新たな拠点を形成することが課題である。	[1][2][3][5]
先導的学際研究機構の領域数	9 領域 (累計)	2021 年 4 月に 1 拠点を新設し 10 領域となる予定である。本機構の中から有望なグループを育成して、世界最先端研究機構の拠点到発展させることが課題である。	[1][5]
データリテラシーフロンティア機構における研究プロジェクト数	24 プロジェクト	昨年度より 1 プロジェクト減少したが、2022 年度の目標は達成可能な水準である。引き続き、データ駆動型科学の考えを学内に浸透させ、研究プロジェクトとなる新たな領域を探索することが課題である。	[1][5]
大阪大学内の国際ジョイントラボ数	89 拠点	国際的研究環境の充実に努めた結果、2019 年度中に 26 の拠点が新設され、89 拠点となった。これにより 2022 年度の目標を達成した。今後は目標規模を堅持すると共に、国際的研究環境の充実にさらに進める。	[4]
外国人教員比率	8.1%	順調に進捗している。引き続き、国際公募を推進すると共に、外国人教員に対する支援を充実する。	[6][7]
若手教員比率	28.4%	若手教員を対象とした支援策を充実させることにより、より魅力的な研究環境になるように努める。	[8][9][10][11]

「事業終了までの」指標	実績 2019	目標達成に向けた課題 (2019 年度設定からの変更箇所を網掛けで示す)	対応する 主な取組
女性教員比率	18.1%	順調に進捗している。女性教員を対象とした支援策を充実させることにより、より魅力的な研究環境になるように努める。	[8][9] [10][11]
自主財源による本部 URA 配置数	14 名	順調に増加している。自主財源による URA を安定的に雇用し、本補助事業雇用 URA と一体的に運用する。加えて、IFReC や部局の URA (類似職を含む) と引き続き連携していく。	[12][13]
URA を配置している部局 (等) 数	10 部局	中間評価時に新たに推進する取組とした、研究マネジメント人材群 (URA 等) の組織化等の結果、順調に増加している。URA の 4 職階 (呼称) がさらに広く学内で適用されるよう、学内ネットワークの連携を深めることが課題である。	[12][13]
グローバルナレッジパートナー校の数	3 校	グローバルナレッジパートナー等による国際協働ネットワークの基盤を形成するために、海外研究者との交流を推進することと、事務職員の国際対応能力をさらに向上させることが課題である。	[14][15]
国際合同会議の件数	97 件 (2013 からの累計)	順調に進捗している。大阪大学の研究者グループと海外の研究者グループとの交流を継続的に推進する。	[14]
若手・女性研究者の海外派遣と海外研究者招へいの数	84 件 (2013 からの累計)	順調に進捗している。URA による研究の DX を勧めつつ、大阪大学の若手・女性研究者と海外の研究者との共同研究を引き続き推進する。	[14]
ガバナンスの効率化のために大学経営総括理事と教育研究総括理事を支援する URA と URA 類似職の数	13 名	ガバナンスの効率化のため、優秀な URA と URA 類似職の確保と活用を進めることが課題である。	[12]
財務基盤強化のために「知」と「人材」と「資金」の好循環を推進する共創機構における高度専門人材数	29 名	「知」と「人材」と「資金」の好循環を推進するため、優秀な高度専門人材 (URA を含む) の確保と活用をさらに進める。	[12]
共同研究講座・部門と協働研究所数	101 件	極めて順調に進捗し 2022 年度の目標を達成した。企業との密接な研究連携をキャンパス内でさらに進める。	[16]
産学連携による民間資金獲得額	96 億円	極めて順調に進捗し 2022 年度の目標を達成した。研究成果の事業化に向けた活動を含め、産学連携を強力に推進する。	[16]
論文剽窃チェックツール iThenticate の登録者数	2254 名	順調に進捗し 2020 年度の目標を達成した。研究倫理意識を高めるための取組を継続して実施する。	[5]
国際公募の割合	94.6%	目標達成可能な水準で進捗している。引き続き、国際公募に係る業務の効率化を進める。	[6]

「中間的な」指標	実績 2019	目標達成に向けた課題 (2019年度設定からの変更箇所を網掛けで示す)	対応する 主な取組
英語による科研費申請数	74件	順調に進捗している。外国人教員が日本人教員と同等に活躍できるように支援を充実することが課題である。	[7]
多様な人材や異分野が融合する若手・女性研究者を含むグループの構成を目指す新たな施策による研究グループ数	6グループ	順調に進捗し2020年度の目標を達成した。継続して若手・女性教員を対象とした支援策を充実させることが課題である。	[10][11]
大阪大学 URA スキル標準の高度化及び運用	第3版の作成(完成)	順調に進捗している。URAの知識と技能をさらに向上させるため、作成・運用開始した新たなスキル標準を日々の業務の中で定着させることが課題である。	[12]
事務職員による海外の大学の訪問企画と調査への参加者数	136名(2013年度からの累計)	順調に進捗している。日常業務多忙の中、企画と実施に充てる時間を捻出すること、及び、新型コロナウイルスの影響を踏まえた取組の企画が課題である。	[15]
実用性検証のための施策(大阪大学 Innovation Bridge グラント)の実施数	49件(2017からの累計)	目標は達成可能な水準で進捗している。研究成果の事業化に向けた取組を継続的に推進する。	[16]

前述のように、本年度の取組は既定方針通り進めることを基本としつつ、[2]、[7]、[12]の取組についてはさらに強化して取り組むこととした。(2019年度設定からの変更箇所を網掛けで示す)

[1] 国の政策情報の収集や国際的研究動向の調査分析、及び研究 IR

新たな WP1 クラスの拠点を形成するため、研究動向に関する情報とデータに基づく研究力分析を推進する。

[2] 世界的研究拠点としてのトップレベル研究に対する支援体制強化

IFReC における専門 URA 人材の養成を継続し、ヒト免疫学研究の推進、優秀な若手研究人材の採用、大型産学連携の推進管理運営を行い、その経験とノウハウの蓄積を行う。

[3] 世界的研究拠点としての国際競争力の一層の強化

IFReC において、URA が運営する国際交流事業により、グローバルナレッジパートナー校を含む海外研究機関の連携と研究人材の国際ネットワークの形成を行い国際競争力の強化を行う。

[4] 国際共同研究拠点の強化(国際ジョイントラボの増設)

オンラインでのディスカッション環境を具備することによる「国際ジョイントラボのリモート化」を推進する。

[5] 研究者の研究倫理意識向上施策の実施

世界的研究拠点として必須である研究倫理の意識向上施策を引き続き実施する。

[6] 教員や研究員の国際公募の推進

教員や研究員の国際公募実施時の業務量の削減のため、URA が人事課と開発した公募要領作成支援ツールの活用を進める。

[7] 外国人研究者に対する研究資金獲得支援

研究資金獲得のための英語マニュアルを現場事務担当者がより活用できるよう改訂する。

[8] 外部資金情報の収集と学内周知、申請書作成支援、模擬ヒアリング等

若手・女性教員を主な対象とした外部資金の獲得支援を URA と事務職員が連携して行う。

[9] 研究情報の積極的な国際発信の支援

若手・女性教員を主な対象とした英語論文の投稿支援に関する取組を URA と事務職員が行う。

[10] 学内人材の多様性を研究力強化に活かすための場の設定

研究者交流の場の設定と新たな支援策の検討を行う。

[11] 異なる研究分野の研究者の連携による研究グループの支援

令和元年度に企画し6件を採択した「異分野融合研究形成支援プログラム」を継続的に支援する。

[12] 研究マネジメント人材群の確保・活用

中間評価時に新たに推進する取組とした、研究マネジメント人材群（URA等）の組織化の一環で構築した本部URAと部局の執行部レベルの研究支援人材とのネットワークを活用し、部局等の中で専門知識や技能の情報共有をさらに深化させる。特に今後重要となる研究のデジタル・トランスフォーメーション（DX）において、研究データの戦略的な収集・共有・活用等、ソフト面からの取組を中心にURAが推進することを検討する。

さらに、URAが全国的に定着することを視野に入れた取組である、ホームページやRA協議会等での情報発信を継続的に実施する。

[13] 研究支援システム改革の横展開

WPIアカデミー拠点であるIFReCの研究支援ノウハウを継続して学内に横展開する。

[14] 国際共同研究の奨励と研究者の交流

海外研究者との交流を推進するため、研究者の海外派遣や外国人研究者の受入をさらに進める。加えて、海外の研究者との合同会議の支援を継続して行う。新型コロナウイルスの影響を踏まえた国際共同研究の試行として、研究のリモート化に取り組む。

[15] 事務部門の国際対応・研究支援能力の強化

事務職員の国際対応能力をより向上させるため、グローバルナレッジパートナー校等でのOJTや調査を実施する。新型コロナウイルスの影響を踏まえた新たな事務職員の国際対応能力の強化施策を考案し実践する。

[16] 研究成果の実用化支援

研究成果の事業化や市場創出の可能性を研究の初期段階で効率的に把握し、実用化に向けた技術検証を行う施策を継続する。

ロジックツリー・ロードマップの利活用・横展開状況

- 研究大学強化促進事業で設定したロジックツリー・ロードマップ、及び、その進捗状況については、適時研究担当理事に報告すると共に、研究推進本部会議において議論し、本学の研究推進施策や学内支援プログラムに反映している。例えば、令和元年度フォローアップ結果にて高く評価されている国際研究拠点の形成については、それをさらに強化すべく、自主財源も加えて国際ジョイントラボの強化を行った。
- 本部・部局のURA（類似職、事務職員を含む）が参加するURAミーティング（隔週開催）において、ロジックツリー・ロードマップ及びその考え方を共有・議論することにより、EBPMに係る組織文化の高揚に繋げている。

特筆すべき事項（定性的な現状・取組状況等）

- 本部URAが所属する経営企画オフィスのオフィス長が毎週定例で大学経営統括理事、研究担当理事と会議を行い、本学の経営方針及び研究方針を本部URAにリアルタイムで共有することにより、本部URAの活動が本学執行部の方針に沿ったものとなるようにしている。
- 本事業プロジェクト重点支援分により雇用しているIFReCのURAが、同機構の事務部門長（WPI拠点における事務部門長と同等の役割）に抜擢され、世界的研究拠点としての国際競争力の強化に対するURAの貢献が一層向上した。

【参考】論文の質に係る指標について

	Scopus			WoS		
	2013-2017 平均	2014-2018 平均	2015-2019 平均	2013-2017 平均	2014-2018 平均	2015-2019 平均
国際共著論文率	27.7%	28.8%	29.9%	29.4%	30.7%	31.7%
産学共著論文率	6.2%	7.3%	7.4%	3.6%	4.7%	5.1%
Top10%論文率	10.7%	10.6%	10.5%	10.1%	10.1%	10.1%

2020.10.7 集計

大阪大学「研究大学強化促進事業」ロジックツリー【概要版】(1)

将来構想

事業終了までのアウトカム
(2021年度-2022年度)

中間的なアウトカム
(2019年度-2020年度)

アウトプット
(2020年度の取組)

アウトプット
(2019年度の取組)

アウトプット
(2018年度の取組)

世界屈指の
イノベーションな
大学

世界的研究拠点の形成	
指標(1)	世界最先端研究機構の拠点数
指標(2)	先進的学際研究機構の領域数
指標(3)	データビリティ/オンライン化における研究プロジェクト数
指標(4)	大阪大学内の国際ジョイントラボ数

研究倫理の意識向上	
指標①	論文割等チェックツールiThenticateの登録者数

卓越した外国人研究者の獲得・育成	
指標(5)	外国人教員比率

国際公募の推進支援	
指標②	国際公募の割合

外国人研究者支援施策の充実	
指標③	英語による科研費申請数

卓越した若手・女性研究者の獲得・育成	
指標(6)	若手教員比率
指標(7)	女性教員比率

若手・女性研究者による研究の推進支援	
指標④	多様な人材や異分野が融合する若手・女性研究者を含むグループの構成を目指す新たな施策による研究グループ数

高度専門人材の確保・活用	
指標(8)	自主財源による本部URA配置数
指標(9)	URAを配置している部局(等)数

URA育成制度の充実	
指標⑤	大阪大学URAスキル標準の高度化及び運用

[1] 国の政策情報の収集や国際的研究動向の調査分析、及び研究IR
2019年度の取組を継続して進める

[1] 国の政策情報の収集や国際的研究動向の調査分析、及び研究IR
2018年度の取組を継続して進める

[1] 国の政策情報の収集や国際的研究動向の調査分析、及び研究IR
研究動向に関する情報とデータに基づく研究分析により、世界的研究拠点形成のための執行部による意思決定をURAが支援する

[2] 世界的研究拠点としてのトップレベル研究に対する支援体制強化
2019年度の取組に加え、ヒト免疫疫学研究の推進に関する支援/ウハウの蓄積を行う

[2] 世界的研究拠点としてのトップレベル研究に対する支援体制強化
2018年度の取組を継続して進める

[2] 世界的研究拠点としてのトップレベル研究に対する支援体制強化
WPIアカデミー拠点であるIFReCが世界最高水準の研究組織としての研究環境の高度化を促すためにURAが若手優秀研究人材確保の取組を行う

[3] 世界的研究拠点としての国際競争力の一層の強化
2019年度の取組を継続して進める

[3] 世界的研究拠点としての国際競争力の一層の強化
2018年度の取組を継続して進める

[3] 世界的研究拠点としての国際競争力の一層の強化
IFReCが世界水準の研究成果を継続して生み出すために、URAが国際機関との交流支援と研究成果情報の国際発信を強化する

[4] 国際共同研究拠点の強化(国際ジョイントラボの増設)
ロジックツリーで設定した成果目標を達成した。今後は目標規模を堅持すると共に、国際ジョイントラボのリモート化等、国際的研究環境の充実を更に進める

[4] 国際共同研究拠点の強化(国際ジョイントラボの増設)
2018年度の取組に加えて、新たに「グローバルナレッジパートナー」校との国際ジョイントラボの形成や、世界トップレベル研究拠点形成に向けた分野における国際ジョイントラボの形成を強化する

[4] 国際共同研究拠点の強化(国際ジョイントラボの増設)
世界で活躍している研究者と大阪大学内に更に多くのジョイントラボを設けて共同研究を推進し、世界的研究拠点としての地位を高める。URAは制度の運営支援と研究者の支援を行う

[5] 研究者の研究倫理意識向上施策の実施
2019年度の取組を継続して進める

[5] 研究者の研究倫理意識向上施策の実施
2018年度の取組を継続して進める

[5] 研究者の研究倫理意識向上施策の実施
世界的研究拠点としての名声を損なわないために、論文割等チェックツールとe-learningにより、論文不正防止の意識を高め、研究倫理教育を高度化する。URAは研究支援の機会にツールの普及に努める

[6] 教員や研究員の国際公募の推進
2019年度の取組を継続して進める

[6] 教員や研究員の国際公募の推進
2018年度の取組を継続して進める

[6] 教員や研究員の国際公募の推進
URAが英文公募支援や外国人に対する面接実施支援とともに、国際公募手続の部局向けツールを作成することによって、外国人研究者の獲得を推進する

[7] 外国人研究者に対する研究資金獲得支援
2019年度の取組に加え、研究資金に関する英語マニュアルを学内の研究支援者がより活用できるよう改訂する

[7] 外国人研究者に対する研究資金獲得支援
2018年度の取組を継続して進める

[7] 外国人研究者に対する研究資金獲得支援
URAが競争的資金制度や学内手続、申請書作成に関する英文マニュアルを作成するとともに、説明会を実施することにより、外国人研究者を育成する

[8] 外部資金情報の収集と学内周知、申請書作成支援、模範ヒアリング等
2019年度の取組を継続して進める

[8] 外部資金情報の収集と学内周知、申請書作成支援、模範ヒアリング等
2018年度の取組を継続して進める

[8] 外部資金情報の収集と学内周知、申請書作成支援、模範ヒアリング等
競争的資金の情報収集や説明会等による学内周知とともに、若手・女性研究者を主な対象として、URAによる申請書作成やヒアリング対応への支援を行うことにより、卓越した研究者に育成する

[9] 研究情報の積極的な国際発信の支援
2019年度の取組を継続して進める

[9] 研究情報の積極的な国際発信の支援
2018年度の取組を継続して進める

[9] 研究情報の積極的な国際発信の支援
若手・女性研究者を主な対象として、URAによる英語論文投稿支援、ホームページ作成支援、英語書籍出版支援等を通して、研究成果等の国際発信を強化することにより、卓越した研究者に育成する

[10] 学内人材の多様性を研究力強化に活かすための場の設定
2019年度の取組を継続して進める

[10] 学内人材の多様性を研究力強化に活かすための場の設定
2018年度の取組を継続して進める

[10] 学内人材の多様性を研究力強化に活かすための場の設定
研究上の発想を柔軟にし、新たな研究アイデアを生み出すため、所属、職種、分野が異なる人々が交流する機会をURAが若手・女性研究者に提供することによって、卓越した研究者に育成する

[11] 異なる研究分野の研究者の連携による研究グループの支援
2019年度の取組を継続して進める

[11] 異なる研究分野の研究者の連携による研究グループの支援
2018年度の取組実績をふまえ、学内の外国人研究者を含む異なる研究分野の研究者からなる融合研究を増加することを企図した新たなプログラムを開始する

[11] 異なる研究分野の研究者の連携による研究グループの支援
若手・女性研究者を含む将来的に発展が期待できる研究グループなど、部局や分野横断的な活動を支援することによって、卓越した研究者に育成する。URAはこの活動の企画と運営に当たる

[12] 研究マネジメント人材の確保・活用
今後重要となる研究のデジタル・トランスフォーメーション(DX)において、学内での高品質な研究データ収集およびデータプラットフォームの構築等の取組を推進することを検討する

[12] 研究マネジメント人材の確保・活用
2018年度の取組を継続して進める

[12] 研究マネジメント人材の確保・活用
URAは研究力強化のために執行部(特に総括理事)、研究者に対する多様な支援を行うとともに、URAのスキルの向上に努める。また、メルマガやホームページ、講演、ミーティング等を通して学内外にURAの知識や技能を提供することによって、高度専門人材の普及に貢献する。それらに加えて、共創機構等の高度専門人材に知識と技能を提供するなどの協力を進める

[13] 研究支援システム改革の横展開
2019年度の取組を継続して進める

[13] 研究支援システム改革の横展開
2018年度の取組を継続して進める

[13] 研究支援システム改革の横展開
WPIアカデミー拠点であるIFReCの世界水準の研究支援体制の企画・運営の経験を、URAが協力して、全学に波及させる

※ 前年度の取組を発展させた繋がりのある取組

※ 本事業による取組の効果(他の事業等による影響を受けない)が検証可能である指標

大阪大学「研究大学強化促進事業」ロジックツリー【概要版】(2)

将来構想

事業終了までのアウトカム
(2021年度-2022年度)

中間的なアウトカム
(2019年度-2020年度)

アウトプット
(2020年度の取組)

アウトプット
(2019年度の取組)

アウトプット
(2018年度の取組)

世界屈指の
イノベティブな
大学

(再掲)

国際協働ネットワークの基盤強化	
指標(10)	グローバルナレッジパートナー校の数
指標(11)	国際合同会議の件数
指標(12)	若手・女性研究者の海外派遣と海外研究者招へいの数

ガバナンス改革・財務基盤強化	
指標(13)	ガバナンスの効率化のために大学経営総括理事と教育研究総括理事を支援するURAとURA類似職の数
指標(14)	財務基盤強化のために「知」と「人材」と「資金」の好循環を推進する共創機構における高度専門人材数
指標(15)	共同研究講座・部門と協働研究所数
指標(16)	産学連携による民間資金獲得額

事務職員の国際研修	
指標⑥	事務職員による海外の大学の訪問企画と調査への参加者数

研究成果の実用化支援	
指標⑦	実用性検証のための施策(大阪大学 Innovation Bridge Grant)の実施数

[14] 国際共同研究の奨励と研究者の交流
研究のリモート化を進めると共に、2019年度の取組を継続して進める

[14] 国際共同研究の奨励と研究者の交流
2018年度の取組を継続して進める

[14] 国際共同研究の奨励と研究者の交流
国際協働ネットワークの基盤強化に資する若手・女性研究者の海外派遣及び外国人研究者の受入れや国際合同会議の開催に関して、URAはこれらの選考の支援をする。また、戦略的組織間連携を推進するパートナー校の選考に協力する

[15] 事務部門の国際対応・研究支援能力の強化
研究支援のリモート化を進めると共に、2019年度の取組を継続して進める

[15] 事務部門の国際対応・研究支援能力の強化
2018年度の取組を継続して進める

[15] 事務部門の国際対応・研究支援能力の強化
国際協働ネットワークの基盤強化のため、事務職員の他機関(外国を含む)の訪問調査等により国際対応能力を強化する。URAは訪問先の選考等にアドバイザーする

[16] 研究成果の実用化支援
2019年度の取組を継続して進める

[16] 研究成果の実用化支援
2018年度の取組を継続して進める

[16] 研究成果の実用化支援
大阪大学の財務基盤を強化する一環として、研究成果の事業化の可能性を研究の初期段階で把握するための施策(大阪大学 Innovation Grant)を実施する。URAはこの活動において、研究情報の提供などの協力をする

指標 I

Nature Index Innovation (Nと略記) や Reuters' World's Most Innovative Universities (Rと略記) などのイノベーションに関する世界大学ランキング

※ 本事業による取組の効果(他の事業等による影響を受けない)が検証可能である指標

※ 前年度の取組を発展させた繋がりのある取組

大阪大学「研究大学強化促進事業」後期ロードマップ

(1) 事業実施計画

		年度	2018	2019	2020	2021	2022	2023	
世界屈指のイノベータータイプの大学	将来構想	事業終了までのアウトカム	中間的なアウトカム						アウトプット
		研究倫理の意識向上	[5] 研究者の研究倫理意識向上施策の実施 世界的研究拠点としての名声を損なわないために、論文剽窃チェックツールとe-learningにより、論文不正防止の意識を高め、研究倫理教育を高度化する。URAは研究支援の機会にツールの普及に努める						
		指標①:論文剽窃チェックツール iThenticateの登録者数			2200				
		世界的研究拠点の形成	[1] 国の政策情報の収集や国際的研究動向の調査分析、及び研究IR研究動向に関する情報とデータに基づく研究力分析により、世界的研究拠点形成のための執行部による意思決定をURAが支援する						
			[2] 世界的研究拠点としてのトップレベル研究に対する支援体制強化 2019年度の実績に加え、ヒト免疫学研究の推進に関する支援ノウハウの蓄積を行う						
			[3] 世界的研究拠点としての国際競争力の一層の強化 IFReCが世界水準の研究成果を継続して生み出すために、URAが国際機関との交流支援と研究成果情報の国際発信を強化する						
			[4] 国際共同研究拠点の強化（国際ジョイントラボの増設） ロジックツリーで設定した成果目標を達成した。今後は目標規模を堅持すると共に、国際ジョイントラボのリモート化等、国際的研究環境の充実を更に進める						
		指標(1):世界最先端研究機構の拠点数						WPIクラス3拠点	
		指標(2):先導的学際研究機構の領域数						10領域(累計)	
		指標(3):データビリティフロンティア機構における研究プロジェクト数						31プロジェクト	
		指標(4):大阪大学内の国際ジョイントラボ数						80	
		卓越した外国人研究者の獲得・育成	国際公募の推進支援	[6] 教員や研究員の国際公募の推進 URAが英文公募支援や外国人に対する面接実施支援とともに、国際公募手続の部局向けツールを作成することによって、外国人研究者の獲得を推進する					
			指標② 国際公募の割合			97%			
			外国人研究者支援施策	[7] 外国人研究者に対する研究資金獲得支援					

	の充実	2019年度の取組に加え、研究資金に関する英語マニュアルを学内の研究支援者がより活用できるよう改訂する					
	指標③ 英語による科研費申請数			80件			
	指標(5) 外国人教員比率					10%	
卓越した若手・女性研究者の獲得・育成	若手・女性研究者による研究の推進支援	<p>[10] 学内人材の多様性を研究力強化に活かすための場の設定 研究上の発想を柔軟にし、新たな研究アイデアを生み出すため、所属、職種、分野が異なる人々が交流する機会をURAが若手・女性研究者に提供することによって、卓越した研究者に育成する</p> <p>[11] 異なる研究分野の研究者の連携による研究グループの支援 学内の外国人研究者を含む異なる研究分野の研究者からなる融合研究を増加することを企図した新たなプログラムを開始する</p>					
	指標④ 多様な人材や異分野が融合する若手・女性研究者を含むグループの構成を目指す新たな施策による研究グループ数			5			
		<p>[8] 外部資金情報の収集と学内周知、申請書作成支援、模擬ヒアリング等 競争的資金の情報収集や説明会等による学内周知とともに、若手・女性研究者を主な対象として、URAによる申請書作成やヒアリング対応への支援を行うことにより、卓越した研究者に育成する</p> <p>[9] 研究情報の積極的な国際発信の支援 若手・女性研究者を主な対象として、URAによる英語論文投稿支援、ホームページ作成支援、英語書籍出版支援等を通して、研究成果等の国際発信を強化することにより、卓越した研究者に育成する</p>					
	指標(6): 若手教員比率					1/3	
	世界屈指のイノベーティブな大学					20%	
	指標(7): 女性教員比率						
高度専門人材の確保・活用	URA育成制度の充実	<p>[12] 研究マネジメント人材群の確保・活用 今後重要となる研究のデジタル・トランスフォーメーション(DX)において、学内での高品質な研究データ収集およびデータプラットフォームの構築等の取組を推進することを検討する</p>					
	指標⑤: 大阪大学URAスキル標準の高度化及び運用			第3版の運用			

		<p><u>[13] 研究支援システム改革の横展開</u> WPIアカデミー拠点であるIFReCの世界水準の研究支援体制の企画・運営の経験を、URAが協力して、全学に波及させる</p>					
指標(8):自主財源による本部URA配置数						16名	
指標(9):URAを配置している部局(等)数						12	
国際協働ネットワークの基盤強化	事務職員の国際研修	<p><u>[15] 事務部門の国際対応・研究支援能力の強化</u> 国際協働ネットワークの基盤強化のため、事務職員その他機関(外国を含む)の訪問調査等により国際対応能力を強化する。URAは訪問先の選考等にアドバイスする</p>					
	指標⑥:事務職員による海外の大学の訪問企画と調査への参加者数			140名 (2013からの累計)			
		<p><u>[14] 国際共同研究の奨励と研究者の交流</u> 国際協働ネットワークの基盤強化に資する若手・女性研究者の海外派遣及び外国人研究者の受入れや国際合同会議の開催に関して、URAはこれらの選考の支援をする。また、戦略的組織間連携を推進するパートナー校の選考に協力する</p>					
指標(10):グローバルナレッジパートナー校の数						5	
指標(11):国際合同会議の件数						100件 (2013からの累計)	
指標(12):若手・女性研究者の海外派遣と海外研究者招へいの数						100件 (2013からの累計)	
	研究成果の実用化支援	<p><u>[16] 研究成果の実用化支援</u> 大阪大学の財務基盤を強化する一環として、研究成果の事業化の可能性を研究の初期段階で把握するための施策(大阪大学Innovation Grant)を実施する。URAはこの活動において、研究情報の提供などの協力をする</p>					
	指標⑦:実用性検証のための施策(大阪大学Innovation Bridge Grant)の実施数			70件 (2017からの累計)			
指標(13):ガバナンスの効率化のために大学経営総括理事と教育研究総括理事を支援するURAとURA類似職の数						13名	
指標(14):財務基盤強化のために「知」と「人材」と「資金」の好循環を推進する共創機構における高度専門人材数						30名	

	指標(15): 共同研究講座・部門と協働 研究所数					85	
	指標(16): 産学連携による民間資金獲 得額					90億円	
	指標 I: Nature Index Innovation やReuters' World's Most Innovative Universities) など のイノベーションに関する世界大学ランキン グ						いずれか におい て、50位 以内

※:「教員」には特任教員(常勤)を含む